

～あした、転機になあれ!～

美し島哲楽さびら。

職場を元気にする哲楽レシピ その十四

「おせっかい」のススメ

機械にはできない
ちよつとした「ひとつ」

「なんだかウチの職場、ギスギスしてて……余裕がないのかな。言葉もやさしくないし」

講演や研修はもちろん、友人との話の中でも、時々そんな話題になることがあります。とりあえず、それぞれ業務はこなしているけれど、笑顔やお互いを思いやる気持ちが不足しているのだそうです。

あいさつひとつ、笑顔ひとつ、ちよつとした声かけひとつ……そんな「ひとつ」が足りないだけで、これほどまで全体の空気や気持ちが変わってくるのかと驚きます。ちよつとした「ひとつ」が、足し算のようになるのでしょね。

一人が「ひとつ」をマイナスするだけで、50人の職場だとマイナス50ポイント。反対に、一人ひとりが「ひとつ」をプラスするとプラス50。その差は100ポイント!?

チームワークがうまくいっている現場には、いくつかの共通点があります。その中のひとつは……「おせっかい」の風土。ここで言う「おせっかい」とは、業務に直接は関係のない(つまり、なくても困らない)ちよつとした「ひとつ」を省かないことです。

効率化が進む中で姿を消してきた

の「おせっかい」ではないでしょうか?

効率化が進んだのは、さまざまな分野における機械化。計算は速くて正確、休みも食事も不要、交通費も残業代も請求されません。人間では不可能な力やスピードをいくつも実現してくれていることは確か。でも、そんな機械にはできないことがあります。

そのひとつが「おせっかい」。私は、そう思っています。

機械が得意なのは「ムダを省く」こと。きつと、機械では「おせっかい」は省くべきムダとして判断されるはず。そして「おせっかい」に定型はなく、タイミングも大事なので、機械には無理だと思ふのです。

「おせっかい」が人の心を救う!

リアルには、波(ゆらぎ)があるのが特徴。人の感情も、心身の調子も、生の楽器の音も、植物の成長にも、天候にも。長年、電子楽器を弾いてきた私にとって、生楽器のもつ独特のゆらぎはいつも憧れであり、驚きでした。機械のプログラムで作るリズムとは異なり、一定の速さを刻んだとしても、そこには不思議なゆらぎがありました。

最近では、CMでも、録音された

音楽でも、機械を使って生み出されているものも多いので、ぜひ、人が奏でている生の音楽と聴き比べてみてください。ちがいに意識を向けることで、現代にサビつきがちな五感スイッチがONになると思えます。

人は、デジタルではなくアナログ。このことを、時々意識することが大事なのではないでしょうか?

若手スタッフが辛さを訴えたときに、先輩世代の方々から「オレたちの時代は機械化されていなくて、手作業だったんだ。今は楽なものだよ。何甘えたこと言ってるんだ!」という意見がたびたびあります。その一方で、若手スタッフからは「手作業だったということは、人がいたわけですよ。大変だねとか頑張ろうね」と言いあえる相手があった。それは恵まれてますよ。機械と向き合っている、癒されません!と悲鳴が上がったのでした。

作業が楽になった現代、心が楽になる機会は減ってしまっているのかも……そんな気がします。缶コーヒー一本、チョコレート一つの差し入れが、どんなに人を励ますか。何気ないひと言が、どれほどの気分転換の助けとなるか。笑顔とあいさつが、こんなにも相手の心を開き、その場にあなたかな風を届けるものなのか。私たちは、忘れてしまっているのかもしれない。

るのかもしれない。

「おせっかい」が、現代の人の心を救う!

ちよつと大きいです。職場の方々の声を聞く中で、本気でそう思っています。そのくらい、多くの人が必要としていると感じるので

す。相手を想う「おせっかい」、今こそ見直してみませんか?

あした……転機に、なあれ

「ちよつ」のチカラ...
見直してみませんか?



紀夕(きき)

哲學家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く力を磨く社員研修を」との依頼を受け、「哲楽のチカラを、笑顔のチカラに」をテーマに、さまざまな企業現場でサポートを行っている。特に「若手リーダー・女性スタッフがイキイキ元気に働ける職場づくり」を哲楽する研修は、好評。現在は、沖縄の表現で「Let's哲楽」を意味する「哲楽さびら。」を合言葉に、沖縄発で職場に哲楽習慣・風土を広めるべく活動を展開中。